

# ホウレンソウの品種紹介

雪印種苗株中央研究農場

安 達 英 人

ホウレンソウは栽培期間が短いため、都市近郊の野菜経営には非常に有利な作物であることと、栄養価値が高く、調理も簡単で、栽培に使用する農薬の量も少ないということが言えます。

従来は秋まき栽培の比重が高く、10~5月の期間は価格も比較的安く大量に出回っていましたが、近年、品種、資材、栽培技術の向上により、夏期の栽培も全国各地で行われています(図1,2)。

夏期のホウレンソウ栽培は、従来長野県を中心とした高冷地に限られていたが、ここ数年では群馬県、北海道、岩手県の伸びが著しく、また北海道ではフライ特出荷により鮮度保持に努めているなど、産地間競争も激しくなってきています。

このような産地間競争に打ち勝つには良品の継

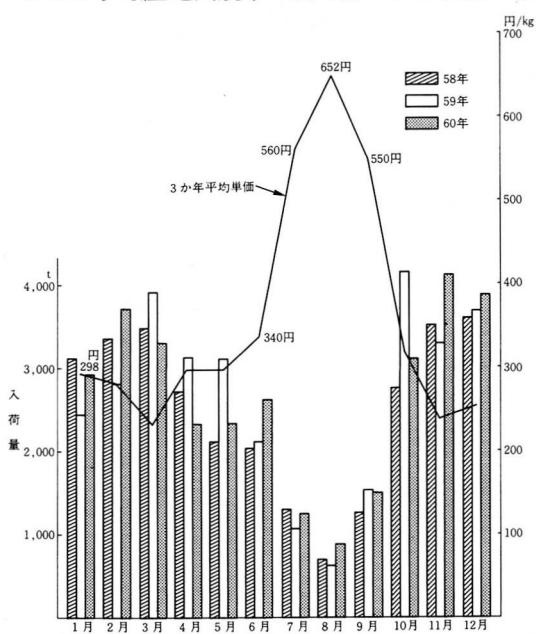


図1 東京都中央卸売市場におけるホウレンソウの年別、月別入荷量及び平均単価

続出荷が重要で、葉色などの品質を重視した、作型に合わせた品種選定が必要となってきます。

以下、当社育成ホウレンソウの品種群の特性と栽培のポイントを簡単に紹介いたしますので、今後の品種選定の参考としていただければ幸いです。

## 1 当社ホウレンソウの品種紹介(表1)

### ◎あやみどり

～低温伸長性に優れ、株張りの良い秋～早春まき用の剣葉系豊産種～

8月中旬～3月中旬播きで低温下での生育が早  
表1 ホウレンソウ品種特性表

品種	適作型	草姿	葉形	葉色	葉面の立ち	耐寒性	病害	抽苔性
あやみどり	晩夏～早春(3月)まき	7	○	濃	無	◎	強	中早
アーガス	春～夏まき	5	○	極濃	少	○	強	やや晚
ジュリアス	晩春～夏まき	5	○	極濃	少	○	強	晚
ジユノス	晩春～夏まき	4	○	極濃	中	△	強	極晚

\*: 数字が大きいほど立性

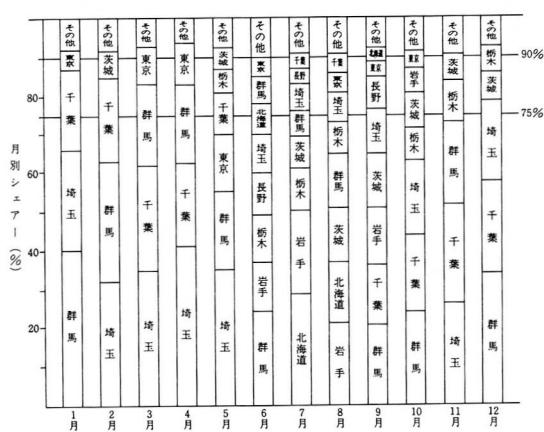
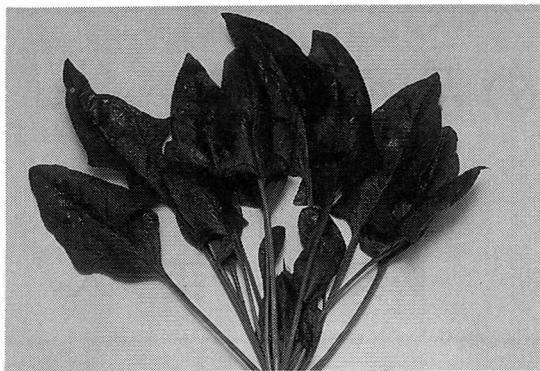


図2 ホウレンソウの月別出荷元  
(1986・東京中央卸売市場)



あやみどり

～冬～春どり用の豊産種です。葉は長三角葉で欠刻があり、葉色・葉面とも優れ、市場性は抜群です。

抽苔性は「中の早」ですので、4月以降の播種は抽苔の恐れがありますので避けて下さい。春、秋作のホウレンソウでは低温・多湿条件下でべと病の発生が多く見られますが、「あやみどり」はべと病に抵抗性があり、作りやすい品種です(図3)。

#### ◎アーガス

～濃緑色で品質抜群、初夏・晚夏どりが本命～

4月上旬～5月下旬および7月中旬～8月中旬播きで生育良好で抽苔も安定して遅く、初夏、晚夏どり専用品種です。葉は長円形で先端がややとがり、葉色は濃緑色で市場性抜群です。べと病に抵抗性があり、作りやすく、汚染地域でも作付けできます(図4)。

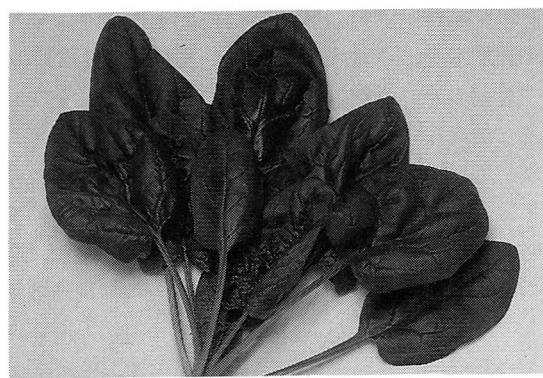
#### ◎ジュリアス

～生育早く、安定した晚抽性で夏どりが本命～

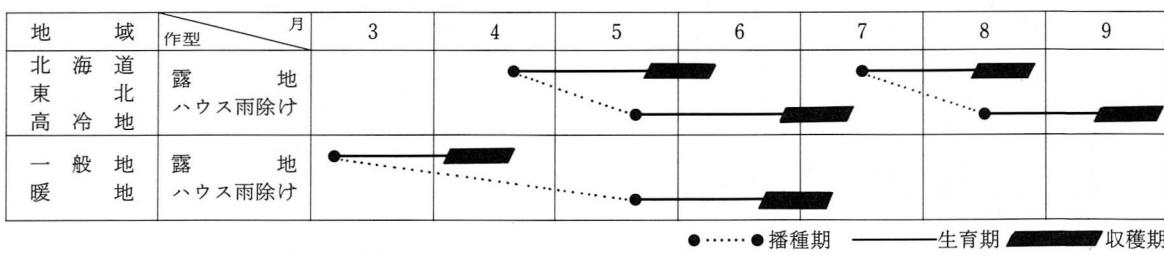
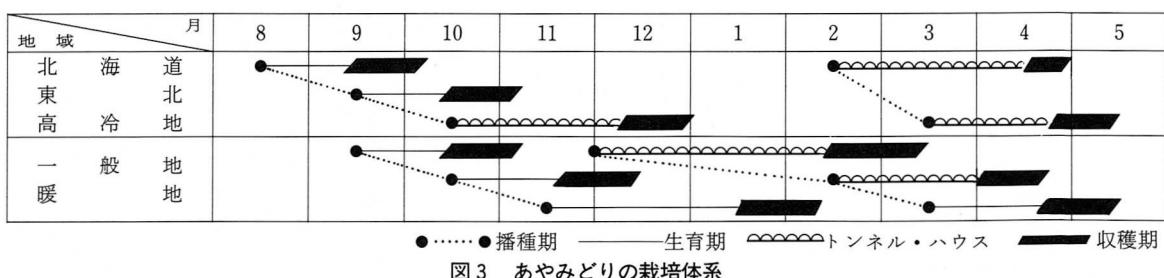
5～7月播きで生育が早く、抽苔は遅く、安定した夏どり専用の豊産種です。葉は長円形で先端がややとがり、葉色は濃緑色で葉面の縮みは少な



アーガス



ジュリアス



地 域	月	3	4	5	6	7	8	9
地 域	作型							
北 海 道 東 高 冷 北 地	露 地 ハ ウ ス 雨 除 け			●	■			
一 暖 地 地	露 地 ハ ウ ス 雨 除 け		●	■		●	■	

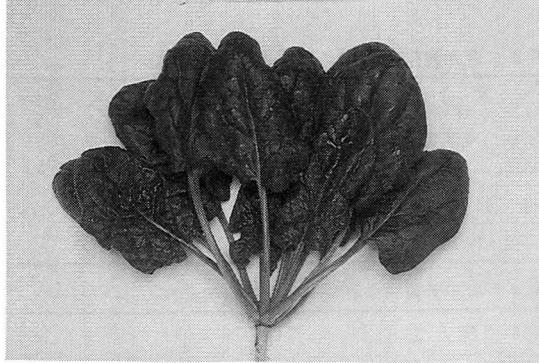
●···●播種期 ———生育期 ■■■収穫期

図 5 ジュリアスの栽培体系

地 域	月	4	5	6	7	8	9
地 域	作型						
北 海 道 東 高 冷 北 地	露 地 ハ ウ ス 雨 除 け			●	■		
一 暖 地 地	露 地 ハ ウ ス 雨 除 け		●	■	●	■	

●···●播種期 ———生育期 ■■■収穫期

図 6 ジュノスの栽培体系



ジュノス

い。草姿は半立性で株張りが良く、また葉身と葉柄のバランスが良いので結束作業が容易です。べと病に抵抗性があります（図 5）。

#### ◎ジュノス

～安定した極晩抽性で夏どりが本命～

6月上旬～7月中旬播種で生育良好。抽苔も極めて安定して遅く、夏どり専用種です。葉は円形で葉肉厚く、葉色は濃緑色で品質良好です。また、株張りが良く大株になり、ボリューム感があります。べと病に抵抗性があり、作りやすい品種です（図 6）。

## 2 栽培のポイント

ホウレンソウは土地の良さを選ぶ作物と言われており、小面積で年間5～7回栽培するため、土壤の悪変が問題となっています。このため、ふ

だんから有機物の補給、土壤の酸度矯正、均衡のとれた施肥などに留意することが最も重要です。また、ハウス栽培は露地栽培より収量、品質が高く安定し、経営上有利で遮光資材の利用とあいまって今後ますます盛んに利用されると思われます。

#### ◎ハウス栽培で良品の継続出荷を

ハウスを利用した栽培体系は図 7 のとおりですが、1棟のハウスで通常年間5～6回栽培が可能で、土地の利用率が高く有利な栽培法と言えます。ハウス栽培の利点をあげますと以下のようになります。



雨除けハウス栽培（ジュリアス）

作型	月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	生育日数											
ハウストンネル	50～55日	○	■									
ハ ウ ス	40～45日		○	■								
雨除けハウス	28～30日			○	■							
雨除けハウス	25～30日				○	■						
雨除けハウス	30～35日					○	■					
ハウス無加温	50～60日						○	■				

図 7 ハウスを利用した栽培体系

ます。

①天候に左右されることなく、播種、間引き、収穫などの作業ができ、計画的継続出荷が可能となる。

②降雨による損傷がないため、規格内率が高まり、汚れのない良品が生産できる。

③水管理が容易で、生育に合わせたかん水ができる、収穫前の水切りによって日持ちの良い良品が生産できる。

④無加温ハウス栽培で降雪時でも播種、収穫ができる、作型の前進、後進が可能。

⑤高温時には遮光資材の利用により、地温を低下させることができ、水管理と合わせて立枯病、萎ちう病の被害を軽減できる。

#### ◎被覆遮光資材の利用

気温がホウレンソウの生育適温以上になる夏期栽培では、遮光資材の組み合わせで地温を低下させる工夫がされています。

雨除けハウスの天井ビニールは従来の一般農ビだけでなく紫外線カットフィルムの利用が盛んで、品質向上、収量増加、萎ちう病の減少などの効果により普及しています。しかし、北海道の夏季冷涼な地域や冷夏時では、一般農ビの方が生育良好な場合があり、利用に当たっては各地の気温、日照量などを考慮する必要があります（表2）。

また、一般農ビを天井被覆とし、高温期にシルバーポリトウのような遮光資材をビニールの上にかけて地温を低下させている例もあります。

関東地方の夏どり栽培では、小トンネルを利用した雨除け栽培が行われており、盛夏期でも白黒表2 紫外線カットフィルムの利用法(夏期栽培)

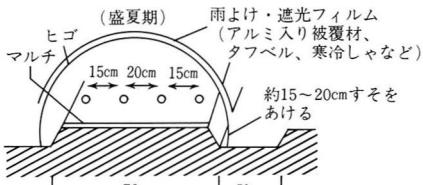


図8 トンネル・マルチ栽培

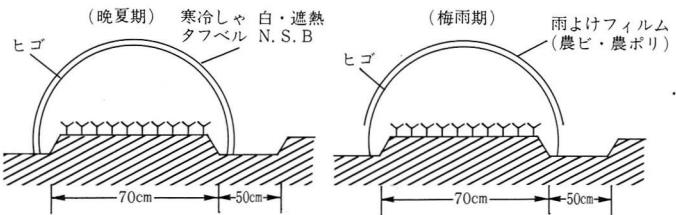


図9 トンネル栽培(I)

トンネル栽培(II)

表3 遮光資材の種類と利用

資材名 栽培時期	透明 ポリ	農 ビ	寒 冷 し ゃ	タ フ ペ ル	アルミ入り被覆材 (シルバーポリトウ) セミシルバー (ピアレスフィルム)
梅雨期	○	○			
高温・乾燥期			○	○	○

表4 マルチ資材と利用

播種期	マルチ資材
4~6月まき	透明か黒マルチ
7~8月まき	白黒ダブルマルチかシルバーマルチ

ダブルマルチの利用によって安定した生産が行われています（図8,9）。この栽培法のポイントは梅雨期と高温乾燥期とでトンネル、マルチ資材を変えていることで、梅雨期は日照が少ないので長を防ぐことから光を遮らない資材を使用し、高温乾燥期には遮光率が30~40%程度の遮光資材を利用しています（表3,4）。

図1のとおり、7~9月のホウレンソウは高価で推移しているため、被覆、遮光資材の利用も積極的に行われております。今後はより産地間競争が激化すると思われます。また、遮光処理によってビタミンCの低下と硝酸含量の上昇が指摘されており、収量・外観品質だけでなく、内部品質をも重視した栽培方法の検討が必要であり、産地として勝ち残る手段であると考えられます。